環境事始　　五帖　　文化財の腐食

上野公園の博物館の脇に文化財研究所があった。いや今もあるに違いない。この施設は柴田雄次先生の発案により、奈良と東京の二ヶ所に設置された。半休先生はこの大先生の孫弟子に当る故若干縁もある。ここに物理と化学の研究者が一人ずつ居て、門倉さんという人が文化財の化学担当だった。先生はこの仁に頼まれてあちこち巡ったが、これも環境調査の走りであって、随分と貴重な体験もした。宇治の平等院に行って驚いた。十円玉に彫られた鳳凰堂無論全体国宝であるが、屋根上のあの鳳凰は腐食されてボロボロ。本物は下ろして宝物倉庫に収納して今は模造品が載せてあるそうだ。実は一キロ先に製紙工場が操業していて発生した硫化水素ガスが流れて来て真っ黒になったのだ。境内にはこれも国宝の有名な釣鐘があったが、同じくやられて刻んだ銘文も読めなくなってしまった。当時役所には公害から文化財を保護する何の権限もなく、法治国家であるが故に法律がなければ無政府状態も同然であった。京都の三十三間堂を調査した時のこと。あそこは御本尊の左右に観音様が千躰、十段に整然と並べてある。その下を観光客がぞろぞろ歩き線香の煙と人埃で仏像の傷みが心配される。先生は最上段の観音様の肩に積もった埃を１センチ角採取して汚染質を分析するのだが、この雛壇の登り降りには閉口した。何しろ細密充填に配置されているから、狭い隙間を一段毎触らぬようにじぐざぐにそろりそろりと這って行く外ない。それでも肱が錫杖に触れると、あれは指の間に浮かせてある丈だからカラカラカラと振れて冷や汗をかいた。万一引っ掛けたら将棋倒しで一躰一億円、寿命が縮む思いだった。埃を採取して証拠写真を撮るとシャッター音に衛士の坊さんが飛んで来て、文化庁の仕事だと断る一幕もあった。普段は客として観る立場が仏様の側に立った妙な感じがした。一寸困った場面にも遭遇した。上野の博物館の敷地に法隆寺宝物館が建ち、空気清浄機を新規に設置したから性能を調べて欲しいと頼まれた。上野はターミナル駅で山の下を蒸気機関車が煤煙を噴き揚げて出入りしていた。お安い御用と濃縮装置を持ち込んで館内空気を採取した。ところがそれが外の空気を取り込んで電気集塵機を通すタイプだったから、煤塵は除去できたか知れぬが汚染ガスは素通り。果して分析の結果、路上の自動車排気がそのまま展示室に送り込まれていた。その上高圧電気でオゾンが発生するようなら一大事、千年の宝物がこれでは不味いのではないかと助言した。所長は頭を抱えて、「口外してくれるな、首が飛ぶから」と口止めされた。勿論先生は頼まれて人が困るような振舞いをする筈はなく、この件はどの様に改善を見たか知らない。ただ昭和 47 年に発見された高松塚古墳の金銀箔彩色壁画が旬年を隔てぬ内に黴で腐食された愚行を聞くと、その非科学的対応が情けない。だってそうでしょう、千数百年の古代より密閉されていた空間に外気を入れたら湿気や酸素や微生物で文化財が侵されるのは必定である。要心も然ることながら、保存事業に関わる組織、研究のための予算と人数が決定的に少なかったことに尽きる。あれから日も経って今はどんな態勢になっているだろうか。国民の宝である文化財は、一旦破壊されたら二度と再生はできない地球環境と全く同様だから、水や大気や生物種と共に人智を尽くして扱うべきなのだ。文化を守るは生活を守ると同断だと思った。